

# 令和6年度 都留市立東桂中学校 学校経営方針

## 〈解説〉

昨年度は、代々大切にされてきた教育実践や教育活動を継承しつつ、先生方のよさを生かした教育実践を大切にしたいと願い、教職員全員で教育活動を展開してきました。その過程において、教職員の学びが促進され、個々人としても組織としても力量が向上していく「学習する組織」を創っていきたくて考えていました。そのような願いの下、学校経営方針は基本的に踏襲された内容としました。

令和6年度に向けてこれからお示しする学校経営方針は、激務の続く先生方に、一方的な要求としてお示しするものではありません。この方針を通して、意識、理念、目標、具体的取組・実践の方向性を皆で「揃えたい」と思っています。「先生方に、ここで示された視点を持って、それぞれの教育実践の質を高めるための指針にして欲しい」という意味だと捉えていただければと思います。この方針は、国による各種答申や指針・学習指導要領等の内容を受けた山梨県学校教育指導指針、都留市学校教育の指針に基づいています。管理職を含め、すべての先生方が学校づくりの当事者として、各校務分掌等の各分担や組織における個々の教育実践のベクトルを同じ方向に向かわせるための指針にし、学年や生徒、保護者等の状況・実態に基づいて、適切に実践していただければと思います。

そこで考えてみたいことは、まず、「学校経営方針にはどのような要素が含まれているか？」ということです。それを以下に示したいと思います。

### 1. 教育ビジョン

- (1) 教育ビジョン…どのような教育を行いたいのか、どのような学校の姿を目指すか、という理念や目標。教育そのものの中身。
- (2) 学校組織ビジョン…上記の理念・目標や教育の中身を達成するために、どのような学校組織づくりをする必要があるか。
- (3) 教職員ビジョン…上記(1)(2)のために、どのような教職員でありたいか、ある必要があるか。

### 2. 経営戦略…上記ビジョンを達成するための方針・方策。どの道を選んで目標を達成しようと思うのか＝その学校の特色をどのようにして創るのか。 ※例えば、探究学習を重視する、など。

### 3. 経営計画…上記戦略を具体化した施策展開や数値計画。 ※例えば、全校教育課程、学年の教育計画、各分掌などの計画、カリキュラムマネジメント（PDCA）、など。

ここでは、以上のような要素を含めながら、本校の学校経営方針が、学習指導要領等の、どのような事柄に紐付いているのか、これからの時代を生きる上で必要となる資質・能力とどのように関連しているのかということを改めて整理してみたいと思います。

学校経営や学校運営は、管理職だけが行うものではなく、一人ひとりの教職員の目の前で実現していくものだと考えます。不易を大切にしつつ、新しい時代に向けた新しい教育の在り方は、先生方が教育活動を展開する実際の教室の中で「具現化」されます。そういう意味で、自らの行う教育実践や業務は、直接的に学校経営や学校運営そのものであるということを共通認識にして一年間お願いしたいと思います。

これから、本校の学校経営方針が持つ意味・意義について説明していきたくて思います。

# 1 学校教育目標

〈解説〉

まず、考えてみたいことがあります。それは、現代とかこれからの時代ということです。それらを描写するのに、よく、「予測困難な時代」とか「急速に変化する時代」、「グローバル化」、「多様性」などという言葉が使われます。教育について、これらの描写を通して、意図されている事柄はどのようなことでしょうか。それはいくつかあるかもしれませんが、一つには、

「求められる人材や人間の力がこれまでとは変わった」

ということなのではないかと思います。もちろん、例えば、「思いやり」「優しさ」といったことは人間として普遍的なもの（不易）でしょう。しかし、例えば、小さな子供に「かわいいね」と優しさや親しみを込めてその子の頭を撫でたとします。宗教や文化によっては、人間の頭の上には神が宿ると考えるので、この行為は深刻な冒瀆となります。小さな子への優しさや親しみさえも、その行動や表現の仕方によっては普遍的ではないわけです。人間として普遍的な思いやりや優しさ・親しみでさえ、従来とは異なった観点からの捉え方や行動様式が必要とされており、従来とは求められていることが変わってきています。すると、単純化して次のようなことが言えるのではないかと思います。

「求められる人間の力が変わった」 ……求められる力とはどのような力か？ 資質・能力とは何か？

↓

「教育のやり方＝学び方を変える」 ……どのように授業や教育活動を変える必要があるのか？

↓

「教師の役割が変わる」 ……変えた授業や教育活動では、教師は何をどうするのか？

↓

「学校の役割が変わる」 ……そのような教育をする学校とはどのような姿となるのか？

最後の「学校の役割」については、もう少し解説しておきたいと思います。学校とは、基本的には、その国や文化において必要な考え方・価値観、伝統、行動様式などを子供たちに受け継がせる場です。つまり、これまでの文化や伝統を子供たちに伝達することに主眼が置かれています。ですから、そのための教育方法は、基本的には、一斉授業で教師が子供たちに講義をして伝達する方式が多く行われてきました。

しかし、人類が生き延びるためには、これまでの文化や伝統を伝達するだけでは事足りない状況が生まれてきました。例えば「環境問題」はその例です。また少子高齢社会において、日本人だけでこの国を維持していくことができるのか（外国人受け入れについて治安の問題なども含めてどう解決していくのか）といったこともその例でしょう。文化や伝統を受け継ぐだけでなく、それらを大切にしながらも積極的にこれからの時代を「創る」時代となっています。そういう時代においては、学校は子供たちに「創る」体験をできるだけたくさんさせていく必要があります。「ああでもない」、「こうでもない」、「こうしたらいいかな？」、「それでやってみよう」、「やってみただけどどうだったかな？」と「試行錯誤」したり「創意工夫」したりすることを子供たちにたくさん経験させていく必要があります。学校の役割は、

文化・伝統の伝達の場合 ⇒ 文化・伝統に基づいた、試行錯誤・創意工夫、創造の場合

へと大きく変化していく必要性に迫られているのだと思います。

私たちは、まず、このことをしっかり強く自覚しておく必要があります。その上で、これから学校経営方針を提案していきたいと思えます。

学校教育目標は、昨年度までと同様です。国の大方針は「令和の日本型学校教育」の創造です。それは、日本の教育の特徴である「知・徳・体」を一体的に育成しようとするものです。東桂中学校でもそれは代々大切にされてきましたので、これは、継続すべき、ぶれてはいけない目標であると考えます。東桂の地域に根ざした東桂の水の中で、これまで大切にされてきた普遍性をもつ目標であると考えます。

## 基本目標

### 「 広い視野と豊かな心を持った、健康でたくましい生徒の育成 」

#### 〈解説〉

ただし、ここでは、「広い視野」と述べています。この「広い視野」ということの意味を先生方が自由に発想し、創意工夫して実際の教育実践に落とし込んでいただければと思います。ここで、「広い視野」に関連し、一つ言えることがあるのではないかと思います。「時間と空間を超えて広がっていく観点を大切にして教育活動・教育指導を仕組んでいただきたい」ということです。

まず「空間」についてですが、「教育実践を教室や学校だけに閉じたものにしない」ということです。学習指導要領で育成を目指す資質・能力の三つの柱の一つは、「学びに向かう力・人間性等」ということです。この資質・能力の言葉の前についている文言は何だったのでしょうか。私は、その文言がとても大切だと思っています。それは、「学びを人生や社会に生かそうとする」学びに向かう力・人間性等ということ。これは、「学校だけに閉じた教科の授業を行わない」、「学校だけに閉じた道徳の授業を行わない」、「学校だけに閉じた特別活動を行わない」ということです。学級経営においても、一年後、「みんなはよいクラスをつくりました。すばらしい！」だけで終わらない、ということ。ポイントは、「一年経てば無くなってしまふような学級を、なぜよりよいものにすることがあるのか？」ということだと思ふのです。いずれは消えて無くなってしまふものを創ることで、どのようなことが自分の人生や社会に生かせるのか、ということ。そういうことを生徒がわかった上で、この東桂中学校を卒業していく必要があると思ふのです。空間的に、学校や教室の外へ向かう観点を大切にするということ。す。

次に、「時間」についてですが、「空間」の話と重なる部分はあるのですが、これまでの自分、これからの自分、これまでの社会、これからの社会というように、「自分」や「現在の社会」を基点として、「過去から未来までがどのようにつながっているのか」の観点を大切にして欲しいと願っています。例えば、社会の歴史で「人種差別」を学んだとしましょう。これに関わっては、有名な人物としてインドのガンジーやアメリカのキング牧師がいます。有色人種の人権保障のために立ち上がった方々ですが、この2人の人物を時間の観点でつないだときに、世界史における意義としてどのようなことが言えるのか、ということ。さらには、日本がすることになった先の大戦とも関わりますが、世界で初めて正式な国際舞台の場で日本が主張した人種差別撤廃の訴えは、2人の人物と関わり合わせたとき、世界史や日本史の中でどのような意義がありどのようなことが言えるのか、さらにはそれを踏まえて、日本はこれからどのように生きていったらよいのか、ということ。時間を超えて広げ、思考・判断・表現することによって、ただの伝達の授業ではなくなります。

生徒たちの「空間」と「時間」を、学校の中だけで捉えさせるのではなく、教室外へ広げて捉えさせるようにしていただけたらと思えます。「空間」とは、自分を中心に、半径10cmではなく、それ以上に広げて、地域・山梨・国全体・世界、ひいては宇宙（すでに世の中のあちこちで宇宙戦略が進んでいます）ということ。そういう、広がりの中で自分の学びを捉えさせていただきたいと願っています。「今日の授業は、毎日の自分の生活とどのように関係があると思ったか、地域や国、世界の在り方とどのように関わりが

あると思ったか？」というふうに捉えさせていただきたいと思っています。また、「時間」とは、自分のこれまでとこれからの人生とのつながり（10年20年後の自分とのつながり、自分が生まれる前、自分が人生をまっとうした後のつながり）、社会の過去・現在・未来のつながりということです。「今日学習したことは、自分の人生の10年後とどのように関係があると思ったか？」などと振り返らせて欲しいと思います。

## 具体目標

- 健康でたくましい生徒
- 人の心の痛みが分かり、思いやりのある生徒
- 進んで学び、感動できる生徒
- 規律を守り、責任を果たす生徒
- 厳しさに耐え、自ら努力する生徒

## 〈解説〉

基本目標に到達するために、5つの具体目標（小目標＝スモールステップ）を設けています。具体的にこのような生徒にしていけば学校教育目標が達成される、ということです。先生方には、ぜひ、この5つの具体目標の本当の意味を自分自身や各担当の業務に落とし込んでいって欲しいと思っています。

「健康でたくましい」とはどういうことでしょうか。日本よりずっと貧しい発展途上国の子供が、「貧しくて紛争ばかりしている自分の国を、政治家になって救いたい」、「自分の親のように病気で亡くなる人を医者になって無くしたい」などと考えて、鉛筆や紙など手元になくても、乾燥した大地の上に指や棒きれで文字を書きながら一生懸命学んでいる現実を知ったときに、東桂中学校の生徒たちは、「健康でたくましい」ということをどのように考え、自らの生活や人生の中に生かそうとするのでしょうか。また、何事も最後は健康がものを言います。自身の健康を維持・向上させたり、必要な疾病などを治療したりすることは、人生をまっとうする上で重要な資質・能力となります。保健室からの保健統計なども参考に、目指す生徒像に迫っていくことが重要です。

「人の心の痛みが分かり、思いやりのある生徒」とは、教科の授業の中で、特別活動の中で、どのような生徒の言動や姿をいうのでしょうか。今次学習指導要領において重視されていることは、目指す目標に照らし合わせて、その目標を実現している実際の生徒の「具体的な姿」とはどのようなものなのかをしっかりと描いて欲しいということです。その、テストの得点のような数値だけではない、「生徒の具体的な姿」のことを「評価規準」と言っています。「評価規準」をしっかりと描いて教育実践し、「評価規準」に照らし合わせて生徒の姿を見取っていくことが重要です。

また、「進んで学び、感動できる生徒」とあります。「学び」と「感動」をセットで述べています。先生方はこのことをどのように解釈しますか。どのように教育実践に落とし込めるのでしょうか。「進んで」ということは、未来社会や現在の自分との関わり・未来の自分との関わりを「自分事」として考えるからこそ生まれてきます。それは、「意欲」ということであり、「興味・関心」ということです。それをどのように喚起したり高めたり強めたりするのかという、指導者側からの視点で捉えれば、「動機付け」、「主体的に学習に取り組む態度の育成」ということとなります。したがって、私たち教職員は、「動機付け」や「主体的に学習に取り組む態度の育成」についての原理を知っておく必要があります。そして、そのことを実態に基づいて具体的な教育実践に落とし込む必要があります。このような教育実践が、学校や先生がいなくなった自分の人生のステージで、自ら自分の人生や社会の問題に立ち向かっていく力（生涯にわたって学び続ける力）につながっていくと考えられます。

続いて、「規律」と「責任」がセットで述べられています。これもどうということでしょうか。QUでは、規律を意味する「ルール」のことを、生徒を外側から縛るものと考えずに、生徒の心の中に定着しているものと捉えています。「責任」については、英語では「responsibility」と言います。「責任のある」は「responsible」

です。これらの単語の前半は、「response」ということで、後半は「ability=能力」, 「able=～する能力のある」です。つまり、何かがあったときに、それに対して主体的にしっかり「反応する」ことであり、そういう能力があることを言います。先生方のそれぞれの教科で学んだ事柄に基づいて、生徒たちが、自らの心の中に定着した規範意識や自らを律する規律に従って、自分の人生や社会に対して何をどのように反応していくのか、ということを行っているのではないかと思います。つまり、「自律（立）学習者」になるということです。

最後になりますが、「厳しさに耐え、自ら努力する生徒」とあります。これは、何らかの特色ある私立学校を除き、近年の日本の学校教育ではあまり目にしなくなっている傾向の文言だと思います。しかし、これが東桂という地域の中の東桂中学校らしさなのかなと個人的には感じています。このように、強さを前面に出しても、「寄り添うこと」も忘れない、そういう教育が東桂中学校らしさのように感じます。人生は山あり谷あり。その現実を、耳障りのよい言葉だけで覆うことなく、ストレートに述べている本目標を通して、東桂中学校の教育（先生方）の、生徒に対する真の誠意・真心・正直さ、生徒たちに対する深い愛情を感じます。

ちなみに、令和5年度の卒業式式辞で述べたこの部分に関わる内容を以下に記載します。

—前略—

「人間万事塞翁が馬」、覚えていますか。人生は何が起こるかわからず、今よいことがよくないことにも、今最悪のことが、将来のよいことにもつながります。ですから、人生には、上に伸びて豊かな葉っぱを茂らせることができるのと、下へ伸びて目に見えない根っこを育てることが必要なときの、二つがあるということを理解する必要があります。

人はともすると、見栄えのよい葉っぱにこだわって自惚れたり、困難の中で「なぜ自分だけ」とひねくれて、根っこの存在に目を向けなかったりします。すると根っこは腐っていきます。人類の歴史には、そういう例がたくさんあります。

本校の合い言葉は「あたりまえのことを大切に」です。私は、これを、人としてあたりまえのことに「心を込める」ことだと考えています。しかも、「普通に」ではなく、「徹底的に徹底して」です。二月の授業で、店内のビールのグラスを、会社のロゴマークが同じ方向を向くように毎日徹底的にまっすぐ揃えて並べ続け、やがては副社長に認められて活躍した人の話をしました。あたりまえの小さな心を徹底して積み重ねると、人が信頼し助けてくれ、必ず道が拓けます。

心を込める生き方は、「恩返し」にもなります。家族や大切な方々は、その姿に安心します。安心・幸せ・平和を、人や世の中に贈ることは、最大の恩返しです。原因の「因」と「心」の文字で成り立つ「恩」とは、「今、自分が生きていられることの原因を考えられる心の働き」です。上に伸びるのが難しいときには、焦らず地道に、恩を意識して、目の前のことに「心を込める」ことを「徹底的に徹底」し、もちこたえ、下へ下へと根を張るようにしてみたらよいと思います。それが本校の目指す生徒像、「厳しさに耐え、自ら努力する生徒」の意味だと私は考えています。この、運命を改善する方法をしっかりと覚えておいてください。

—後略—

5つの具体目標に迫ることを通して、学校教育目標に迫っていきましょう。

## 《基本目標・具体目標に迫るための、教育実践における観点》

「あたりまえを大切に、恩を感じ取り、未来社会に向かって、気づき、考え、実行しようとする学習活

### 動の展開」

#### 〈解説〉

昨年度は、その前年度までに掲げられていた「目指す生徒像」の内容に「恩を感じ取り、未来社会に向かって」を付け加えた上で、同様に「目指す生徒像」として掲げていました。しかし、すでに基本目標の次に具体目標として「生徒像」が5つ掲げられています。その上で「目指す生徒像」として掲げられていた上記内容は、全体の中での位置づけがわかりにくく、曖昧であったように思います。したがって、本年度は、「目標に迫るための教育実践における具体的観点」として整理するようにしました。これまでもうすでに、多少詳細に必要な教育内容や教育方法について述べてきましたが、授業その他の教育実践を仕組む上で貫く観点が、上記内容ということで理解していただきたいと思います。

昨年度の学校評価における生徒の回答では、「あたり前のこと」の説明として、「あいさつ」「健康管理」「交通安全」「授業」「家庭学習」「部活動」など、数多くのことが挙げられていました。生徒たちの発達段階に応じてわかりやすく「あたりまえ」の内容を提示したり考えさせたりすることはとても大切なことだと思います。また、学びや成長が進むにつれて、自身が考える「あたりまえ」の内容にも広がりや深まりが生まれてくるとも思います。生徒が考える「あたりまえのこと」は、生育歴や育ってきた環境なども異なるので、大切だと思う「あたりまえのこと」にもそれぞれ重点の違いがあつてよいでしょう。

ただ、これら「具体的なあたり前の各項目」が、「人生や社会のどのようなことにつながっていくのか」ということを常に意識して、前述したように、「学びを人生や社会に生かそうとする」という側面を重視して支援・指導にあたっていたらと願います。

「恩を感じ取り」についてですが、一昨年度は、「不易と流行を意識して欲しい」との考えが学校経営の方針に込められていました。その「不易」の部分で、昨年度からは「恩を感じ取り」としました。生徒たちが、自らの人生に意欲を持って向かっていくには、「自分が今生きていられることの原因を感じ取る心の働き」が必要です。そのことを実感できたとき、自らの命や人生の尊さに改めて想いを馳せ、自分の命は自分だけのものではないということを理解し、自分も他人も大切に生きていこうとする気持ちや考えを持つるのではないかと思います。基本目標にある「豊かな心」の基盤は、「恩を感じ取る心の働き」と考えたいと思います。ですから、各教育活動の中で、「恩」とか「お陰様」ということに目を向けさせるようにしていただけたらありがたいです。

そして、「未来社会に向かって」というところにも注目していただきたいと思います。基本目標に「広い視野」とありますので、「未来社会に向かって」という文言を付け加えました。先生方もご承知のように、未来社会は絶対的な正しい答えというものは存在しない予測困難な社会です。従来のペーパーテストのように、一つの答えが唯一の正解となるような社会ではないのです。そのような社会においては、まず、自分の身の周りや社会の問題について「気づく」力が必要です。そして、その問題を解決すべき課題として整理して捉え、「考え」て、未知の事柄に対して、絶対的な答え（絶対解）でなくとも、多くの人々が納得できる「納得解」、その時点で最適だと考えられる「最適解」として答えを導き出し、「実行」していくことが必要です。これは、学習指導要領で、いろいろな状況や場面において必要とされる汎用的な能力として整理されている、「問題発見・解決能力」ということにあたります。

問題を発見して解決に向かうためには、必要なことを、ICT等も駆使して調べたり新たに学んだりして、知識を得て、物事に対する理解を深め、知識を生かし使って考える（知識・技能を生きて働かせる）必要があります。このように知識を得る過程で、必要な道具や技術を使って調べたりする技能も身に付いていきま

す。思考して答えを得るためには知識や技能を活用することが必要です。これは、学習指導要領の中で汎用的能力として整理されている「情報活用能力」に通じるものです。そして、こういった自分なりの答えを産み出すためには、自分一人の中だけでなく、多様な他者（人・周囲の文物・文献・先哲の考え等）から学び、自分の考えを深めていく必要があります。このような対話的・協働的学びを進めるためには、汎用的能力である「言語能力」が重要です。もちろん、「言語能力」は自分の中で思考する際にも重要な能力です。

以上述べたように、私は、本校の「目指す生徒像」は、学習指導要領の言う、「三つの汎用的能力」と「資質・能力の三つの柱」に通じるものであると考えます。

#### －育成すべき資質・能力の三つの柱－

- 「生きて働く」 知識及び技能
- 「未知の状況にも対応できる」 思考力・判断力・表現力等
- 「学びを人生や社会に生かそうとする」 学びに向かう力・人間性等  
(教科の授業においては、「主体的に学習に取り組む態度」)

この三つの資質・能力の育成をあらゆる学びにおける目標として設定して育成していくことが大切です。その育成の過程において「汎用的能力」である、

「問題発見・解決能力」

「情報活用能力」

「言語能力」

も育成していく、という関係性になっていると考えられます。

三つの柱については、私は、上記のかぎ括弧の部分が最も重要であると考えています。それはすなわちこういうことです。

- ・知識や技能を「生きて働かせる」活動や授業の設計になっていますか？「まずは知識を教えなければこの課題はできない」という潜在意識・固定観念はありませんか？「まったく新しい単元だとしても、その単元に関わる生徒の知識や経験はまったくゼロではなく、そのわずかな知識や経験を生かす」という授業設計になっていますか？
- ・活動や授業の中で、「未知の状況に出遭わせてあげていますか？」「決まりきったことを指示されたとおりに行う活動や授業になっていませんか？」
- ・「教室の中だけに閉じた活動や授業になっていませんか？」「教室から時間的・空間的に広がりのある授業や学習活動になっていますか？」「人生や社会、学ぶことの意義の理解や自覚と切り離された活動や授業になっていませんか？」

これらを、東桂中学校の教育の質をより一層高めていくため、支援・指導の改善、授業の改善の視点として捉えていただければ幸いです。職員会議や学年等での提案や教育実践において、このことを従来より少しだけ意識して、従来の目標設定を少し整理して提案したり共有したりするようになっていただければありがたいです。

## 《目指す学校像》 「地域が誇る東桂中学校」

- ① 生徒が、よりよく生きる意欲・学ぶ意欲を持ち、「楽しく、明日も来たい」と実感できる学校
- ② 教職員が相互に信頼し合い、助け合い、やりがいと誇りを持てる学校
- ③ 家庭・地域とのつながりを大切にし、信頼できる教職員が集まっていると思っただけの学校
- ④ 「社会に開かれた教育課程」を基盤に、よりよい学校教育を通してよりよい社会を創るという目標を地域と共有する、地域とともにある学校

### 〈解説〉

この「目指す学校像」の言葉から私が思い出すのは、3学年主任をしていたときのことです。私は修学旅行前日の結団式の日（日曜日）に、保護者を招くことにしました。そのときの修学旅行では、奈良・京都・広島を訪ねる予定でした。私が常々思っていたことは、どのような修学旅行になるのか保護者が知らない、ということでした。修学旅行は、学校側が、生徒にとって学びの多いものとなるように強い意図を持って計画されるものですが、その内容を保護者が知ることにより、教育効果がさらに高まると思ったのです。そこで、結団式では、従来の通り一遍の結団式ではなく、広島で行う予定の活動を、そのまま保護者の前で行うことにしたのです。その姿を見せ、「私たちは、このような修学旅行に行ってきたと思います。このような修学旅行のために、これまで大金を積み立てていただき、ありがとうございます。お父さん、お母さん、家族の愛情にしっかり応え、将来は社会の役に立つ人間になれるよう成長できる修学旅行に行ってきます」というような生徒代表の言葉とともに結団式を締めくくりました。

この結団式は、学年行事として考えていましたが、最終的には一学年も二学年も参観するように当時の学年主任の先生が計画してくださり、結果的には全校行事の形になりました。当時の学年主任の先生の考えには、『全体や他の部署の教育活動と「関係付ける・関連付ける・連携する」中での自分の分掌での教育活動』という意識やねらいがあったのだらうと思います。これも、カリキュラム・マネジメントの一つの姿であると思います。もちろん、私自身も、他の分掌や他の先生方が行う教育活動等にはたくさんの機会にお世話になり、力をお借りしてきました。

結団式に話を戻しますが、修学旅行現地での生徒たちへのフィードバックで活用できるようにと、その結団式でのアンケートも保護者から取っておきました。そのアンケート（保護者＝父親）の内容は、今でも鮮明に覚えています。それは次のようなものでした。

「学校で、このような教育をしてくれているということをはじめて知りました。本日のような子供たちの発表を見て聴いて、本当に感動し、鳥肌が立ちました。このような教育を本当にありがとうございます。家に帰り、しっかり学んでこい、と送り出したいと思います。自分の子供が、このような学年に所属できていることに感動し、誇りに思います。」

地域や保護者が、学校に対して誇りを持っただけなのは、①にあるように、生徒たちが、よりよく生きる意欲・学ぶ意欲を持ち、「楽しく、明日も来たい」と実感してがんばっていることが適切に伝わる時なのではないでしょうか。そして、そのために教職員が生き生きと働き、心を開いて地域や保護者と接し、質の高い教育をしてくれているということが伝わる時なのではないでしょうか。そういう意味で、「地域が誇る」ということにおいては、私たち教職員は、独りよがりな教育指導ではなく、「相手意識」を持つことが必要だと考えます。そこで、③を少し変更し、「信頼できる教職員が集まっていると思っただけの学校」としてみました。

そして、④として、「社会に開かれた教育課程」について明記しました。これは、「よりよい学校教育を



通してよりよい社会を創るという目標を社会と共有する」ことが目的です。学校でどのような人間が育成されるのかは、社会の在り方に直結する事柄なので、一般社会も学校教育について関心を持ち、相互理解に基づいて教育と社会の在り方を創り上げていこうということです。社会と学校が教育の目的を共有するためには、まず、学校側のアクションとして、生徒の学習活動を単に紹介するだけでなく、「なぜそのような学習活動になっているのか」、「どのような資質・能力を育成しようと考えているのか」を伝えていく必要があります。あるいは、意図的に実際の生徒の姿を見せることを通して、教育内容や様子を知っていただく必要があります。そのことを一人ひとりの教職員がそれぞれの分担で努力し、実現していくことが重要であると思います。

ちなみに、「地域とのつながり」と言ったときには、「小学校との接続・連携」ということも含まれます。小学校でどのような学習活動を行っているのかを十分考慮することが必要です。生徒たちは、中学校に入学した時点で、すべてが「ゼロ」というわけではありません。小学校六年生までに培ってきた力やプライド（誇り）を大切にしていけることが大切だと思います。さらに、東桂地区には保育園が二つあり、県立高等学校、産業短期大学、都留文科大学、健康科学大学もあって、都留市として教育改革を大胆に進めています。

こういった情勢から、昨年度③に残されていた「開かれた」学校という意味の文言は、「地域とともにある」という表現に改めました。学校は、もうすでに「開かれた学校」という時代ではなく、「地域とともにある学校」という時代に入っています。それは、例えば、地域に住む高齢の方が、子供との関わりで元気してもらい、生きがいをもって生活できるような地域づくりという側面からの学校の存在意義も考慮することです。「地方創生」の試みは全国の各地で行われるようになっていますが、例えば学校運営協議会（コミュニティ・スクール）も、これからの日本社会をどのようなものにしていくのかに関わるトータルパッケージの中での教育政策でもあると考えられます。学校は、生徒の **Well-Being** はもちろん、地域住民一人ひとりの **Well-Being** にも深く関係している存在です。学校で働く教職員は、すでに、学校のことだけを考えて働く時代ではなくなっています。全員で意識改革を図っていきましょう。

## 《目指す教師像》

- ① 自他の心身の健康を大切にする教師
- ② 生徒に寄り添い、一人ひとりを大切にし、真心と情熱をもって教育に取り組む教師
- ③ 気持ちの良い返事と挨拶、相互に助け合い、人との関わりを大切にする教師
- ④ 家庭・地域との相互理解・連携に努め、信頼され、愛される教師
- ⑤ 専門職としての誇りを持ち、協働性・同僚性の中でチーム（組織）の一員として、常に研鑽し、よりよく生きる意欲・学ぶ意欲に満ちた教師
- ⑥ 持続可能な東桂中教育を工夫・改善する教師
- ⑦ 教育公務員としての使命を自覚し、その職務に厳正な態度で取り組む教師

## 〈解説〉

ここでは、学校教育目標に迫ることにおいて、どのような教師である必要があるのかについて述べたいと思います。

①については、すべての基本だと考えます。何より大切なのは、先生方の「心身の健康」です。誰もが幸せな人生を生きる権利を持っています。そのことをしっかりと心に留め、勤務していきたいと思います。

②については、社会生活をする上であたり前のことではありますが、①と同様に、生徒も一人一人が大切です。その生徒一人一人に寄り添い、真心と情熱をもって接していけたらよいと思います。

③は、その次の④、⑤とも関連するのですが、個の中に閉じることなく、外に開かれた個々の意識や連帯を大切にしていきたいと思えます。例えば、学校内だけでなく、地域や外部の業者の方々などに対しても、意識して挨拶や親切な応対ができる学校でありたいと思っています。業者の方々には、他の多くの学校にも出入りしています。必然的に、各学校の違い（教職員の違い）を口では言わなくとも感じています。「東桂中学校はいいね」と思わせる学校でありたいと願います。また、電話応対においても、「いいな」と相手を感じる親切や明るさを心がけていただきたいです。電話に出るときには、まず、学校名と名前を名乗りましょう。保護者や地域の方々の中には、客商売の人やビジネスマナーがあたり前の方、ホスピタリティの専門家などもいることでしょう。そういった方々にも、「先生方はよくわかっているね」、「気持ちのいい学校だね」と思ってもらえることが、保護者や地域からの信頼につながると思います。そういう、小さな積み重ねが、「地域が誇る東桂中学校」につながるのではないかと思います。これまでも十分意識されていると思いますが、改めて確認させていただきました。

④については、その大切さはどの先生も実感しているところであると思えます。子供たちは地域の中で育っていきます。家庭や地域が時代と共に変容してきているということはあると思えますが、学校だけが独立して存在しているわけではありません。国の政策でも、教育の面からの学校の存在意義だけでなく、地域づくり、地域振興、地方創生といった面からも、子供たちが集う学校の存在意義が語られています。日常の小さな応対の積み重ねによって、信頼感が増していくように思います。

次に、⑤についてです。まず、先生方にしっかり自覚しておいていただきたいことは、自己研鑽のようなそれぞれの先生方の「自律性」に基づいた「自主・向上性」と、自分以外の人々との関わりを対象にした「協働性・同僚性」とは、共に非常に重要なものであるにも関わらず、基本的には相反するベクトルだということです。教育という仕事（学校における教職員の仕事）は、本来は高度に「自律性」の高いものです。学級一つとっても、学級担任の学級経営は、学校教育目標や学校経営方針を受けながらも、多くが学級担任の創意工夫に任せられています。それは、各教科の授業においても同様で、たとえ学校長であっても容易に立ち入れないくらいの雰囲気を持っています。子供は師弟関係の中で育っていくので、教育という営みにおいては、このような当事者同士の「自律性」は、本来自然で、必要なものと考えられます。自律性があるからこそ、「創意工夫」や「試行錯誤」が生まれます。医者による外科手術をAIやロボットによる遠隔操作で行う技術が研究されていますが、これはすでに手術法が確立されている手術に対して、それを事前にプログラムすればよいのでできることです。しかし教育の仕事は事前にプログラムすることのできない、「創意工夫」「試行錯誤」の連続の仕事であるので、AIでは代替できない仕事の一つであると言われています。「自律性」と「創意工夫」や「試行錯誤」はセットなのです。

このように、「自律性」に基づいて自分を高めようと努力する「自主・向上性」はとてもよいことですが、それだけだと自分だけの世界となり、組織的に取り組むための「協働性・同僚性」の要素が薄くなります。反対に、周囲と仲よしだけだと、よりよい教育を追究するという専門家としての力量をないがしろにすることとなり、「協働性」という面でも一つの目標に向かって一緒に「挑戦する」ということが薄くなり、「なれあい」の関係になりがちになります。「まあ、こんなもんでいいか」という、創意工夫や試行錯誤をして挑戦することのない「なれあい」による教育実践が生まれるのです。ですから、「自主・向上性」と「協働性・同僚性」というのは、本来は相反するベクトルだと言えます。

しかし私たちは、「チームとして」、「組織として」この東桂中学校の教育に取り組まなければなりません。例えば、前述したように学級担任の行う学級経営は高度に自律的なもので、どのようにすればよりよい学級ができるのかについては、学級担任自身の「自律性」に基づいた「自主・向上性」に任される部分が大きくなります。しかし、いじめ重大事態など、一旦学級経営が行き詰まり、生徒や保護者と大きなトラブルになったり、法律や裁判などの問題が関わることになったりしたときには、学校全体や教育委員会・自治体までを含めた大問題となります。つまり、個人で行っていた「個業」としての自律的な業務の結果は、一気に「組織全体」の問題となります。個業だったはずの業務が組織全体の信頼関係を左右してしまうことにな

るのです。

教育とは、教育指導の在り方を自ら探究するという「自律性」の高い営みであり、当事者である教職員の「自主・向上性」に任される部分も大きくなるからこそ、「個業」が普通の姿になりがちな性質を持っています。ですから、学校組織の特徴というのは、

自律的な個々の教職員の独立性と分離性が保たれ、お互いに働きかけられればそれには応えるが、自らの教育実践以外には目が向きにくくなり、自ら協働性や同僚性を積極的に創り出そうとする意識と行動が、日々の業務の中で発揮されにくくなる「疎結合システム」の組織

だということです。このことをまずはしっかり理解する必要があります。学校組織が持つそういう本来の特徴を理解していないと、大変な業務や問題を抱えて孤立し、メンタルを病む教職員が増加してしまう恐れも多くなります。また、そもそも個業で行う教育活動は小さなもので、限界もすぐ訪れることでしょう。

学校で働く教職員には、「自主・向上性」と「協働性・同僚性」の相反するベクトルの双方が高度に要求されます。自らの力量を向上させたいと思ったら、「協働性・同僚性」の中で「チーム（組織）の一員」として、「自主・向上性」としての自己研鑽に励む必要があります。一人一人の教職員が「個人としての力量向上」と「組織としての力量向上」の双方を意図することで生徒たちが育つこととなります。

そういう意味で、研究や研修の機会を重視していただきたいと思います。同僚同士で学び合える校内研究会を重視していただきたいと思います。形だけ行う校内研究会ではなく、自らの教育実践の質的向上を図るための実質的な意味や意義のあるものとして取り組んでいただければと思います。旅費をいただいて研修できる職業など、他にはないことも改めて確認しましょう。学校教育目標や方針の下、自分自身の業務や分掌は、他の教職員の業務とどのような関係・関連があり、学校全体の中でどのように位置付けられるのか、ということ意識して、お互いの力量を高めていければと思います。立場に関係なく学校全体を常に視野に入れて、自らの校務分掌や自分たちの分担において、どのような力量を自らの中に蓄えればよりよい学校づくりにつながっていくのか、と考えていただきたいのです。自分が興味・関心のある（ぜひ身に付けていきたい、もう少し勉強してみたいと思う）事柄が、学校全体や学年などの教育活動の質の向上にとって、どのように位置付けることができ、どのように貢献できるかと考えていただきたいのです。そう考えて業務を進めることによって、個人と組織がつながっていきます。

ただ、無理をする必要はないと思います。各自が自分のペース、自分のやり方で、少しずつ進めていただければよいと思います。組織の教育力を高めていくことにおいて大切なのは、「自主・向上性」と「協働性・同僚性」の双方の高度なバランス、調和だということをもまずは皆で心に留めて、そのことを共通認識にしていただければと思います。

そして、そのような教職員組織を創る上で大切なのが、「常に学び続ける」ということです。「自主・向上性」は「自分として常に向上し続ける」ということ、「協働性・同僚性」とは「常に同僚から学び続ける姿勢を持つ」ということです。これはちょうど、「令和の日本型学校教育」で言われている「『個別最適な学び』と『協働的な学び』の一体的な充実」と軌を一にします。両者を高度に調和させていくには、いずれにしても、「常に学び続ける」ということが生命線になります。

「常に学び続ける」とは、別の言い方をすると、「現在の自分の枠から常に外へ出て行くことを心がける」ということです。「現在の自分でよしとしない」ということです。すなわち、「自主・向上性」と「協働性・同僚性」が高度に調和する組織とは、「学習する組織」である必要があります。新しい時代の新しい教育の具体的な姿は、待っていて実現するものではなく、生徒たちが実際にいる教室から、先生方一人一人が自ら創造していくものであると思います。立場や職はそれぞれ異なりますが、教職員一人一人が、新しい時代の学校の姿を産み出していく当事者です。楽しく試行錯誤・創意工夫しながら学校づくりや教育実践を行っていきましょう。そのことが、「目指す学校像」の項でも触れた「教職員が相互に信頼し合い、助け合い、

やりがいと誇りを持てる学校」につながっていくと思います。

⑥については、二つの意味があります。一つは、よりよい教育を創造するため、教育活動の「能率化・効率化」による「質の向上」ということを意識するということです。別の言い方をすると、一つの教育課題に対して、綱引きのように、同じ綱を皆で同じ方向に引くようにしたいということです。例えば、何かの行事（特別活動）があったとします。その行事における目標を達成するために、特別活動だけでそれを達成することを考えずに、各教科の授業では何ができるか、道徳の授業では何ができるかなどと考えてみるということです。命の大切さを考えさせる場合、道徳の内容項目（道徳的価値）、理科の授業、英語の授業、数学の授業、朝の会や帰りの会における自転車や登下校の指導、防災の指導などが考えられます。同じ課題に対して皆でいろいろな側面から同時に（横断的に）取り組むのです。そうすることによって、組織的な教育活動となり、皆で分担して教育効果を得るための「能率化・効率化」が図られると考えます。これはカリキュラム・マネジメントの一つの形だと思いますが、大々的で「大きな」カリマネではなく、多忙の中ですから、あまり無理をしない「小さな」カリマネを現実的に積み上げていくということによいと思います。こういった観点も意識しながら、先生方の教育実践を創意工夫してみていただけたらと思います。

二つ目は、一つ目とも関連しますが、「働き方改革」ということです。上記一つ目は、教育活動の能率化・効率化によって働き方を改善していくということですが、働き方改革は、法令も含めた国レベル・自治体レベル、学校レベル、個人レベルと重層的に取り組む課題となっています。先生方の個人的な生活や人生と教職生活が質的によりよくなることが教育活動の質の向上につながります。生徒の **Well-Being** を保障するためには、先生方の **Well-Being** がまずは重要です。従来からの「時間外在校等時間月 80 時間」、「きずなの日」、「定時退校日」に関わって県教委からも新たに取組が示されています。学校現場では大変難しい面があることは重々承知していますが、できることからお互いに実行していきましょう。

最後の⑦ですが、これは、私たちが取り組む業務のすべての土台となります。学校業務に関わる「職務上の義務」と学校業務を離れたところでも義務となる「身分上の義務」が私たちには課せられています。そのことを改めて確認し、仕事を行っていきたいと思います。

#### －職務上の義務－

- ①サービスの宣誓をする義務（地方公務員法第 3 1 条）
- ②法令等及び上司の職務上の命令に従う義務（地方公務員法第 3 2 条）
- ③職務に専念する義務（地方公務員法第 3 5 条）

#### －身分上の義務（生活のすべてで適用）－

- ①信用失墜行為の禁止（地方公務員法第 3 3 条）
- ②守秘義務（地方公務員法第 3 4 条 1）
- ③政治的行為の制限（教育公務員特例法第 1 8 条 1）
- ④争議行為等の禁止（地方公務員法第 3 7 条 1）
- ⑤営利企業への従事等の制限（地方公務員法第 3 8 条 1）

以上、いろいろな側面から「目指す教師像」について述べてきましたが、これらを皆で心に留めて実際の業務に落とし込んでいくことが「危機管理」にもつながると思います。本年度は教員配置定数が 2 名減となってしまい大変ですが、先生方の英知を結集し、東桂中学校の教育の質をより一層向上していけるよう、よろしく願いいたします。

■教員の仕事には三種類ある。

- ・教育成果の高い学校では、前例主義に陥らず、必要な事柄には常に改善が試みられており、そればかりでなく、今後必要となる大小の変化に対しても、積極的に改善や挑戦が行われており、下記三つがバランスよく実践されている。
- ・教育成果の低い学校は、特に（２）～（３）において面倒くさいと思ったり変化を嫌ったりする者を中心に不協和音が働き、（１）のみでよしとする者とそうでない者が分断化されている。その結果、教育成果が停滞もしくは下降している。

- （１）日常的課題 …特に工夫も必要ない、日常的なルーティンワーク。
- （２）改善的課題 …常に工夫改善を加えていく課題。
- （３）大局的・未来的・戦略的課題…未来社会、我が校・教育の未来や在り方のために今行う必要のある課題。

■成果を上げる組織では「心理的安全性」が保障されている。ハーバード大学ビジネススクールのエイミー・C・エドモンドソン教授が提唱した。それを構成する要素は、以下の四つ。この四つが組織内に育つように、一人一人が努力することが重要。ただ、心理的安全性が行き過ぎると「なれあい」となる。

- （１）話しやすさ
- （２）助け合い
- （３）建設的な挑戦
- （４）新奇歓迎

■チーミング（チーム学校）

社会の急速な変化の中、プログラムやプロジェクト、目的や目標に応じて組織のメンバー構成が異なる場合が社会全体に増えている。その都度チームメンバーが異なり、多様な他者とよりよい問題解決をしていくことのできるチームを創り上げていくことができる資質・能力の重要性が注目されている。またそのような多様性のある組織を生かすためのリーダーシップの在り方も重要課題となっている。

学校においても、常勤スタッフばかりでなく、非常勤、地域・外部機関の方々も含めて、その都度チームメンバーが変化することが普通になってきている。激しく変化する社会の中で、民間も公的部門も、そういう流動的な組織の在り方が現在では追究されるようになってきている。

－まとめ－

上記三種類の仕事をバランスよく行うことを通して、組織を創り上げる過程（プロセス）に各自が参画する意識を持ち、実際にそれを実践する（＝チーミング）。その組織づくりの過程において、一人一人が相互に心理的安全性を創り出すようにしていく。

## 《教育重点》

### (1) WEBQU を通した教育活動の質の向上（諸課題に対する一体的取組）

小学校から中学校までが一校で接続される本校においては、基本的には同一集団のメンバーによる進学とその後の中学校生活となります。このことによるメリットは、①進学時における友人関係の不安が軽減される、②集団の中での自分の位置づけが小学校時から比較的定まっておき、複数の小学校から進学する場合に比べ、集団における自分の位置をはじめから模索する必要がなく、比較的安定して中学校での集団生活に適応しやすい、③連帯感や所属感、団結力をより一層高めていきやすい、等があるように思います。このようなメリットを生かす教育により、現在、東桂中学校は、自治的な、素晴らしい生徒集団となっており、落ち着いた学校生活を送っています。

しかし、何事もコインの表と裏の関係があるように、時と場合によっては、メリットは克服する必要のある課題や留意事項となることもあります。そのような観点から昨年度の本校教職員の話し合いの中で指摘された問題はいくつかありましたが、共通して指摘された最大公約数的な問題を課題化すると、以下のような内容でした。

#### 1. 本校の実態から捉える教育課題（仮説・可能性）

(1) 地域における幼少期からの生育環境の特徴から、子供たちの集団内に「人間関係の固定化」や「役割関係の固定化」が起こっており、それぞれの発達可能性や個性の発揮が狭められ、集団の中で限定化・階層化している可能性があること。

例：アメリカにおける貧困地区（社会における階層の固定化）

(2) 集団の中での自分の位置付けが自分でもある程度満足し安心して過ごせる場合には充実感を持って過ごせるが、お互いの関係性が壊れてしまったり、集団内の位置付けの満足度や自己存在感が低かったり、周囲から軽んじられることが恒常化していたりするなどの状況がある場合には、生活しづらさや不適應感を抱え続け、何らかの出来事をきっかけに集団から脱落していってしまう可能性があること（集団内により意味での流動性が少ないため、人間関係の幅が狭く、やり直しがきかない）。

(3) コロナ前においては不登校が多い時期が続いていたが、従来の本校における教育方針や教育活動に乗り切れず、不適應を起こしてこぼれ落ちている生徒が一定数いた可能性があること（コロナ禍においては、従来の活動の多くが制限され実施できなかったため、そのような生徒にとっては、居心地がある程度よかった可能性がある。したがって、ポストコロナで様々な教育活動が従来通りの内容や方針で復活してきたときに、コロナ前と同じようなことが起こる可能性があること）。

(4) 比較的学力が低い現状の中で、授業を中心とした学習活動に困難を抱え、学びづらさ、生活のしづらさを感じながら学校生活を送っている生徒が一定数いる可能性があること。

(5) 生徒自身の様子や家庭環境などの多様化による生徒の育ちが従来とは大きく変化してきており、生徒集団内の異なる支援レベル（一次支援・二次支援・三次支援）のバランスが、従来の（昔ながらの）集団内のバランスとは大きく変わってきている可能性があること（支援ニーズのバランスの変化＝一次支援レベルの生徒の減少と二次支援・三次支援レベルの生徒の増加）。

→かつてとは異なる集団づくりの難しさが存在していること。

→生徒の実態と教育支援・教育指導の在り方のマッチングを図ることが益々重要となってきた。

## －課題のまとめ－

- ★小中学校一校ずつで九年間の義務教育期間を過ごすことによるメリットが、逆に、人間関係の固定化・役割関係の固定化・人間観の固定化を生み出し、本来多様な可能性を持つ生徒の成長機会を生かしきれていない可能性があること。
- ★そのことにより、中学校生活における潜在的・顕在的な不適応、中学校卒業後の新環境における不適応のリスクが存在しているかもしれない、本来、享受できる成長の機会を得ることができないまま、やり過ごされている生徒がいるかもしれないこと。

## 2. 上記課題を踏まえた指導重点

- 集団の「安定度」と「活性度」の向上による「教育力のある懐の深い集団づくり」  
「生活集団」と「学習集団」の一体的育成による個の成長支援（自立への支援・指導）

これまでの教育活動の、 「精度」を上げる、  
 「質」を上げる、 ことに注力していきましょう。

### (1) 具体的取組の柱

WEBQU を活用した学習活動の質の向上

～学級における「安定度」と「活性度」の実態とのマッチングを重視した柔軟な支援と指導～

- ◆かつてとは異なる集団づくりの難しさが存在することを意識し、教育活動や教育指導の在り方を常に疑い、支援と指導を工夫する。

### (2) 具体的取組

#### ①WEBQU の活用（安定度と活性度の向上）

- ア) 年三回の実施
- イ) 分析と活用（チームによる分析とチームによる活用）
- ウ) 学級満足度の向上（ルールとリレーションのバランス維持の取組、安定度の向上）

#### ②授業改善

「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実による主体的・対話的で深い学びとなる学習過程の授業

- ア) 単元全体で授業をデザインする。…バックワードデザイン（逆向き設計）による単元デザイン
  - 教科の授業ばかりでなく、それ以外の学習活動においても、資質・能力の三つの柱立てによる目標設定と、その目標を実現している生徒の姿である「評価規準」を描くことを常識とする。
  - 「主体的に学習に取り組む態度」の育成（家庭学習とのつながり）
    - ・「個別最適な学び」の指導 ……「動機付け」の工夫と「学習方略」の指導
  - 「思考力・判断力・表現力」を重視した授業を行う。
    - ・探究的な要素を取り入れた単元デザインや授業デザイン
    - ・新しい友達の側面を発見し、リレーションを広げ、深め、協働的な学びを促進することができるのと同時に、学力向上にも寄与する。
- イ) 「地域の中で育つ子供たち」、「地域とともにある学校」の要素を授業その他の活動に取り入れる（どのような形、規模でもよいので）。

○山梨県，郡内，都留市，東桂の素材（人的・物的資源の活用）

③二次支援ニーズを持つ生徒の見極めと支援に，より焦点を当てるようにする。

ア) まず，質の高い一次支援（開発的・予防的支援＝発達支持的支援）を行う。

イ) 上記アを前提としつつ，「支援ニーズ（援助レベル）の判断→要因の検討」という流れで考え，検討し，実践する。

…「要因をまずしっかり見定めてから対応策を検討・決定する」では，対応が遅くなり，見落とすものがある可能性がある。

例：○いじめ問題 …その4割は特別支援の問題（純粋にいじめだけの問題ではない）。

○中学一年生の不登校問題 …その3割は学力不振問題（純粋に，家庭の養育環境や心理的な問題ばかりではない）。

※当然，複雑に絡み合う発達や養育の問題等の見極めは重要。しかし，複雑に絡み合う要因は，すぐには明らかにならない場合も多いので，「まずは対応し，実践しながら見極めていく」という側面が重要。

ウ) T2の先生方，支援員の先生方，学力向上支援スタッフ，SAT等とも情報共有し，共通確認・共通実践事項として取り組む。

④新たな自分と仲間の発見（人間観の涵養）

ア) リーダーとフォロワー，役割と責任を固定化せずに流動化させ（バランスよく体験させ），お互いのよさの新たな発見につなげる。

イ) 意図を持った生活班・学習班の編制

・「○○の課題を解決するための班づくり」というように，班づくりを課題解決の手段にしていく（クリアできたら次の課題を解決するための班づくりを行う）。

ウ) 必要に応じたソーシャルスキルの指導（日常の学校教育活動の中で指導していく）

⑤昨年度までの効果や成果のあった支援や指導の継続

## －参考－

■現代の学校現場…子供集団における二次支援の子供の割合は，2割前後になってきたと言われている。

主な原因：先天的障害に関わる問題 < 家庭での養育の問題

※本校を例にすれば，およそ27人が二次支援対象生徒ということになる（27人が集団から脱落する大きなリスクを負っているということ）。

■生徒の支援ニーズの概要説明

○一次支援を必要とする生徒

・目立った問題行動がなく，不適応感も少なく，一斉指導や全体の活動に自ら参加できる生徒

○二次支援を必要とする生徒

・現時点で問題行動は表出していないが，内面に問題を抱えていたり，不適応感が高まったりするので，トラブルや不適応を未然に防ぐためにも，一斉指導や全体の活動の中で継続的なさりげない配慮が必要な生徒

○三次支援を必要とする生徒

・すでに問題行動が表出しており，学級内で，一人で自立して生活や活動ができない状態で，個別に特別の支援が求められる生徒

■各支援の対象

(1) 一次支援…すべての生徒に対して行うもの（予防的・開発的＝発達支持的）。

(2) 二次支援…一部の生徒に対して行うもの（援助ニーズの大きい生徒に対して，問題が大きくならな



いたための予防的な支援や発達支持的支援を行う。）。

(3) 三次支援…特定の生徒に対して行うもの（個別的支援，不登校・いじめ・非行への対応等）。

### 3. その他（今後，検討や対応が必要と考えられる事項・令和5年度学校評価等）

(1) 教師の指導行動や何気ない言動について

○生徒・保護者の不公平感，疑問，問いかけが寄せられている。

(2) 校則（頭髪・服装・下着等）について

○「明確に示す規則」と「マナー・エチケット・心得指導」との違いを明確にする。

○社会に流布する一元的な校則問題の捉え方を念頭にした丁寧な説明の必要性

(3) 制服の検討・研究

○冬季の寒さ（特に女子）

○LGBTQ+等

(4) 混合名簿

○男女別名簿との棲み分け

(5) 部活動の運営

○事前の予定立案，練習（試合）予定等の変更の周知や周知の仕方

○部活動地域移行の正確な理解のための周知と学校の姿勢や取組の説明

(6) 開設部活動と部活動地域移行の取組

(7) 組織的・協働的な教育活動について

(8) スマホ持ち込み等，不要物持ち込みの現状について

(9) ポストコロナにおける学校教育活動について

(10) 主体的に学習に取り組む態度の指導

○家庭学習や宿題と関わって

○評価について

(11) 進路情報の適切な提供や周知

○その年に応じた進路情報

○高等学校への進路指導における教師側の基礎知識や基本的理解等

(12) 生徒の姿を見せていくこと・知らせていくこと（入学生減の状況）

・東桂中学校の教育で生徒がどのように育っていくかを機会があるごとに周知していくこと

(13) 都留市の教育改革を意識していくこと

○都留市の教育改革の方向性

○学校運営協議会（コミュニティ・スクール）への取組

・小中連携校、一貫校、義務教育学校